



2018年度
国際キャリア教育プログラム
「合宿セミナー」

国際キャリア教育
事前学習資料集

主 催：大学コンソーシアムとちぎ 宇都宮大学
後 援：(公社) 栃木県経済同友会 (公財) 栃木県国際交流協会、
NPO 法人宇都宮市国際交流協会 いっくら国際文化交流会 JICA 筑波
協 賛：(一財) 栃木県青年会館 (公財) あしぎん国際交流財団
キリンビールマーケティング(株) 栃木支社

目次

(敬称略)

目標とルール	1
はじめに	2
実施要綱	3
プログラム	4
倫理綱領・個別ガイドライン・問題事例	5
「全体講義」との講師の紹介（重田 康博）	
混迷の時代の国際キャリアを考える－真のグローバル人材に必要な条件	6
分科会 A と講師の紹介（石川 尚子）	
ゼロからの挑戦：チャンスはつかむもの	8
分科会 B と講師の紹介（西森 光子）	
民際協力：復興から地域の自立発展に向けて	10
分科会 C と講師の紹介（渡辺 直子）	
NGO にとっての国際協力～あなたはどこから世界を見る？～	13
分科会 D と講師の紹介（福村 一成）	
国際協力・国際開発を仕事にすること考えてみませんか？	16
分科会 E と講師の紹介（飯塚 明子）	
多文化共生社会のなかの活動力－労働、仕事、活動、キャリアー	18
分科会 F と講師の紹介（岩井 俊宗）	
違いを強みに変えるコミュニケーション	21

●目標とルール

国際キャリア教育合宿セミナーの参加者はルールを守り、目標の達成に向けて励んでください。

目標

- 「働く」とはということなのかについて考える。
- 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
- 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

- どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
- 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
- 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
- 自分独自の意見を述べよう。
- 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
- 時間厳守で行動しよう！
- 安全、健康に注意をしよう。

●はじめに

国際キャリア教育プログラムに参加される皆様

国際キャリア教育運営委員会 委員長
国際学部国際学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、過去 14 年間における参加者数は約 1600 名に及び、多くの学生（宇都宮大学生、他大学等含）が参加しております。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア教育」、英語で全て授業を行う「International Career Seminar」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化 (Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、(公社) 栃木県経済同友会、(公財) 栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財) 栃木県青年会館、(公財) あしぎん国際交流財団、そして、キリンビール(株) 栃木支社からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要綱

- 1) 科 目 名： 国際キャリア教育～2018年合宿セミナー～
- 2) テ ー マ： グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日 程： 2018年9月15日（土）～17日（月）＜2泊3日＞
- 4) 会場・宿泊： コンセーレ（栃木県青年会館）
 ＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
 ＜問合先＞TEL: 028-624-1417
 ＜URL＞ <http://www.concere.jp/>
 ＜地図＞



- 5) プログラム： 2頁を参照
- 6) 参加定員： 60名
- 7) 参加費： 12,000円（食費・宿泊費を含む）
- 8) 問合せ： 宇都宮大学国際学部 事務室（5号館A棟1階）
 担当： 光永 淳子
 ＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町 350
 ＜問合先＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
 E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（9月15日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1
	分科会「国際ビジネス A」 講師：石川 尚子
	分科会「国際協力・国際貢献 B」 講師：西森 光子
	分科会「国際協力・国際貢献 C」 講師：渡辺 直子
	分科会「国際協力・国際貢献 D」 講師：福村 一成
	分科会「多文化共生と日本 E」 講師：飯塚 明子
	分科会「異文化理解・コミュニケーション F」 講師：岩井 俊宗
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（9月16日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（9月17日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	ふりかえり／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

1. 国際キャリア教育プログラム倫理綱領

本プログラムの関係者は、以下の原則に従って行動します。

- ① その活動において、常に基本的人権と個人の尊厳を尊重します。
- ② 国際学部並びに本プログラムの教育目標の実現に資する教育を行うために、改善と向上に努め、学生の自発的な学習を支援します。
- ③ 学修目標を明確に示し、学生への対応や成績評価などの学生指導全般において、公正を確保します。
- ④ 個人情報保護に最大限の注意を払います。

2. 倫理綱領に基づく個別ガイドライン

以上の倫理綱領に基づき、特に以下の点について配慮をお願いいたします。

- ① 人種やジェンダー、言語、宗教、国籍、社会的背景、年齢等が異なる多様な参加者で構成されているプログラムであることに留意しつつ行動します。
- ② 食事や信仰生活を含む生活様式を尊重し、可能な限り対応します。
- ③ ハラスメントに該当する行為は決して行いません。
- ④ ハラスメントに関する情報を得たり相談を受けた場合には、放置せずに対応します。
- ⑤ 参加者による主体的な学びを尊重し、その提案や意見を積極的に取り入れます。

3. 具体的な過去の問題事例

(事例にある「参加者」とは、講師、スタッフ、学生等の参加者全員を意味します。)

事例 1) 国籍による差別発言

ある参加者から「A 国人は物を盗む」といった国籍による差別的な発言があり、その国籍を有する他の参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 2) ジェンダーや多様性への配慮を欠いた発言

ある参加者が、男性的な服装をしている女性の参加者に対して、「いい歳なのだから、もう少し女性らしくしないと」とジェンダーに関する配慮に欠ける発言があった。その結果、トランスジェンダー¹であるその女性参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 3) ハラスメントに該当する行為や発言

ある男性参加者が懇親会で他の参加者に酒を飲むようにしつつこく勧め、男女問わず「付き合っている人はいるのか」等と質問をして無理に答えを聞こうとしたり、女性の参加者に対して酔っ払いながら「肩をもんでくれ」と頼んだりした。

事例 4) 主体性や協働を認めない教育

分科会において講師が一方向的に講義を続けたり、一部の参加者のみが発言を独占する事態が発生した。その結果、学生たちが主体的に協力しながら行う議論や全体発表準備のための作業時間を、十分確保することができなかった。

事例 5) 許可を得ないで行う個人情報や写真の使用

ある参加者が、他の参加者の連絡先などの個人情報や撮影した写真を、相手の許可なく SNS などを使って公開し、別の目的で利用した。

¹ トランスジェンダーとは、出生時に決定された性別に性的違和（性同一性障害）があり、性別を変えて生活していたり、性別を変えたいと思っている人（性と人権ネットワーク作成パネル、2014年より）。

混迷の時代の国際キャリアを考える

— 真のグローバル人材に必要な条件 —

☆講師プロフィール

氏名：重田 康博（しげた やすひろ）

所属：宇都宮大学 国際学部 教授

国際キャリア教育運営委員会委員長



略歴：

北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了（博士・学術）

国際協力推進協会（APIC）主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員（イギリス・ロンドン）、現、国際協力 NGO センター（JANIC）主幹等を経て現職。専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。開発教育協会評議員、JVC とちぎネットワーク代表。CMPS 福島乳幼児妊産婦プロジェクト・アドバイザー、JANIC 政策提言アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』（明石書店 2005）、『国際 NGO が世界を変える』（共著、東信堂 2006）、「第 4 章ミレニアム開発目標」田中治彦編著『開発教育—持続可能な世界のために』（学文社 2008）、重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017 年

全体講義の内容

今世界は混迷の時代とされています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。

★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。

21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曾有の危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバリゼーションの進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO（市民社会組織）も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。

この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。

では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011年6月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめでは、そのポイントとして、「語学力向上（英語）」と「内向き志向」の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？

☆宇都宮大学グローバル構想—「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献

☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い2017年4月から実施）

⇒21世紀型グローバル人材（グローバル人材）の育成

☆国際学部の卒業生は、その多くがグローバル企業、マスコミ、NGOなどで働き、国内外で活躍しています。

★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。

「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思います。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals）」は、2015年9月の国連総会で採択され、17の目標と169のターゲットからなり、2016年から2030年までの15年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが問題の解決に向けて取り組むことが求められています。

☆「地球公益（地球市民のための公益、Global Public Interests）」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思います。

参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』明石書店、2015年
- 加藤／九木元『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』青弓社、2016年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 2012年

ゼロからの挑戦：チャンスはつかむもの

☆講師プロフィール

氏名：石川 尚子（石川 ひさこ）

所属：オリオンコンピュータ株式会社 代表取締役、
オリオン IT 専門学校 理事長

略歴：

栃木県立今市高等学校卒業後、地元企業に就職。いくつかの職業を経験の後、最後の仕事で出会ったコンピュータの可能性を感じ、1998 年オリオンコンピュータ(株)設立。その後 2005 年オリオン IT 専門学校設立。現在、アジア圏の留学生に沢山学んでいただいております。



1. 仕事の内容・研究テーマ

私は 30 歳の時に、「オリオンコンピュータ(株)」を起業しました。初めは小さなパソコン教室から始まり、37 歳で「オリオン IT 専門学校」を設立しました。社名の通り、コンピューターと教育に関わる仕事を 20 年続けています。その中で、私の仕事は「繋ぐ」事だと考えて行動しています。

人と人を繋ぐ・国と国を繋ぐ・人と社会を繋ぐなど、IT と教育を駆使して「繋ぐ」を実践していきます。

2. キャリアパス

栃木県で生まれ・育ち、地元の高校を卒業後、地元の企業に就職。何回目かの転職先で、「コンピューター」に出会う。

このコンピューターとの出会いが、私の人生に大きな影響を与える。

「バブル崩壊」の波が地元栃木にも押し寄せた頃、初めて「不況」という体験をする。しかし、経験の浅い（無知な）自分には、事の重大性が理解できず、「何とかなる」と安直に考えていた。そして、30 歳で起業する。

3. 分科会の内容

皆さんにグループに分かれ、会社（仮想）を作ってください。会社設立に必要な事から、実際に運営が始まると、どのような問題や課題が出てくるのか？など、疑似体験をしながらチームワーク（組織）の意義など、学んで行けたらと考えています。

4. キーワードリスト

- 仕事
- 夢
- 幸せ
- 価値観

5. 参考資料等

- 「実学」…稲盛和夫 著書
- 「ドラッガー式マネジメント」関連本

6. 事前予習用リーディング課題

もし、自分が会社を作るとしたら、何（物・サービス・技術など）を売りますか？

A) そして、なぜその商材を選びましたか？を考えて来てください。

民際協力：復興から地域の自立発展に向けて

☆講師プロフィール

氏名：西森 光子（にしもり みつこ）

所属：特定非営利活動法人パルシック 東京事務所
民際協力担当

略歴：

国立国会図書館に勤務の傍ら NGO のボランティアを経験した後、ケニアでのインターンを経て、スリランカでの現地駐在員として内戦復興事業を担当。帰国後は東京事務所でスリランカ、マレーシア、石巻での事業を主に担当。英イーストアングリア大学開発経済学修士号取得。



1. 仕事の内容・研究テーマ

スリランカでの現地駐在を経験した後、東京事務所で民際協力事業のバックオフィス業務（事業企画・申請、資金管理、事業の進捗管理）を担ってきました。日本とスリランカ、マレーシア、石巻市北上町を往来する中で、各々の国・地域で、様々な学びや経験を得てきました。30年近く内戦の続いたスリランカでは、内戦復興の困難さを実感するとともに、同時に日本では感じることでできない人と人とのつながりや時間の緩やかな流れの中で活動をしてきました。マレーシアでは、急速な経済発展がもたらす環境や人々の生活への影響の深刻さを見る一方で、他者への寛容さ、多様な文化の持つダイナミズムに魅せられてきました。自分自身の学びや経験を日本の若い人たちにも伝えたいとの思いが強くなり、今年からは、民際教育事業を担当し、日本の大学生や高校生、研究者の方々のためのスリランカやマレーシアでの研修プログラムづくりに協力しています。

日本の仕事のルールや価値観と、スリランカやマレーシアの時間感覚や価値観の間を往来しながら、同じ目標を目指して日々やりとりしています。お互いの状況に思いを馳せて相手を配慮しながら、それでも譲れないところを主張しつつ、信頼関係を築きながら活動しています。

2. キャリアパス

<経済学部から図書館に就職>

周囲の友人たちが就職活動に動き始めても、物をたくさん売ることや金融業でお金を増やすということに関心が持てず…。夜遅くまで仕事に追われるのではなく、自分で学び考える時間が持てる仕事に就きたいと思い、国立国会図書館に就職。主に国会向け調査業務を担当。

<仕事をしながら NGO のボランティア>

国際協力 NGO の報告会やセミナーに参加し、興味をもった団体でボランティアを開始。

外の世界の視点が持てること、代表や事務局長等の役職に就いている人も同じ問題意識を持って、同じ目線で上下なく話ができる環境が好きで、NGO で働きたいと思うように。出会った人たちから「現場」の面白さを教えてもらい、仕事を辞めてケニアに行くことを決断。

<ケニアでインターン>

安定した仕事を辞めるということで、周囲からは大反対を受けたものの、退職して渡航。そこでエイズ予防教育事業を補佐。現場業務の面白さを知るとともに、日本にはない躍動感や人の逞しさに魅せられ、豊かさや貧しさについての考えが変わる。

<英国留学を経て、スリランカに駐在>

ケニアでの経験を通して、英語力を付けたいという思いが高まり、英国の大学院で開発経済学を専攻。授業でフェアトレードについて学び、日本で売られているフェアトレード商品に興味を持つようになる。「フェアトレード コーヒー」で検索して、最初にヒットしたのがいま勤務している団体。イギリスまで送ってくれるよう注文したところ、とても感じよく対応してくれ、さらに飲んだコーヒーが美味しかったので、求人を見つけて応募。スリランカでの勤務となる。スリランカでは、内戦後の社会で様々な困難に直面しつつ3年間復興事業を担当。

<東京事務所勤務から今>

スリランカから戻ってしばらくは東京の目の回る忙しさ、夜遅くまで働き続けるのが当たり前の社会、細部にこだわる仕事内容等々、日本流にカルチャーショックを受けることも…。日本人がマレーシアやスリランカなどアジアの他の社会から学ぶ必要性を感じ、「民際教育事業」に力を入れるようになり、現在に至る。

3. 分科会の内容

一般的に国内外で事業を実施する NGO は、対象地域の社会状況や課題に応じて①緊急救援（人道支援）から②復興事業、③開発事業へと段階的に事業内容を移行していきます（団体によって専門性や得意分野もあり、全ての団体が上記をすべて実施するわけではありません）。パルシックは、基本的には、民際協力として、上記①から③のすべての段階で事業を実施し、その後も各地域の人びととの交易や交流によって対等な関係を築いていくことを目指し、長期にわたって地域と関わり続けています。

分科会では、日本の NGO の変化や取り巻く状況についても概観しながら、

- (1) 各々の事業実施段階で必要とされる事業内容について話し合い、
- (2) そのうえで各段階での事業実施においてどういった能力が必要かを考え議論します。
- (3) 上記の1、2を踏まえて、ご自身が関わりたい分野やそこに向けて必要なことが何かを一緒に考えましょう。

4. キーワードリスト

- (1) 南北問題
- (2) 格差社会
- (3) 人道支援の国際基準
- (4) 社会的企業／社会起業家

5. 参考資料等

- (1) 中村尚司（1994）『人びとのアジア－民際学の視座から』（岩波新書 360）岩波書店
*アジアの現場を歩き回り、また在日外国人のためにも奔走してきた著者（パルシク理事）が、各地で出会った庶民の生活を通して、紛争や経済開発下でもたくましく生きる人びとを描き、「本当の豊かさとは？」と問いかけています。
- (2) 甲斐田万智子、佐竹眞明、長澤一史、幡谷則子 共編著(2016)『小さな民のグローバル学 共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版
*第9章ではパルシク東ティモール駐在員として現地で15年以上活動する伊藤淳子が、経験や葛藤を論考しています。
- (3) 松島泰勝（2012）『民際学の展開 方法論、人権、地域、環境からの視座』晃洋書房
*中村尚司氏が提唱した「民際学」の考え方を共有しながら、執筆者が各々の活動、研究、生き方をまとめた論考集。
- (4) 見田宗介（2006）『社会学入門－人間と社会の未来』（岩波新書 1009）岩波書店
*国際協力だけではなく、社会を広く捉える視点が必要だと思います。
- (5) ベネディクト・アンダーソン著、加藤剛訳（2009）『ヤシガラ椀の外へ』N T T出版
*名著『想像の共同体』で知られる東南アジア研究者による自叙伝。井の中の蛙になるのではなく、「ヤシガラ椀の外へ」出ることの意味やフィールドワークの面白さ、対象地域への思いが書かれています。

6. 事前予習用リーディング課題

上記参考資料から少なくとも1冊は読んで参加してください。

NGO にとっての国際協力

～あなたはどこから世界を見る？～

☆講師プロフィール

氏名：渡辺 直子（わたなべ なおこ）

所属：特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

調査研究・政策提言／南アフリカ事業担当



略 歴：

イギリスの環境保護 NGO 勤務、日本の大学院を経て、2005 年南アフリカ事業担当として JVC に参加。2010 年度より同国現地代表を経て、2012 年度より再び現職。2013 年からモザンビーク小農組織との合同調査を開始、現在までに 9 回の現地調査を行う。アフリカ、ブラジルの農民、市民社会組織／NGO とともに、国境を超えたアドボカシー活動を展開している。

1. 仕事の内容・研究テーマ

南アフリカ事業担当として、HIV 陽性者やエイズで親を亡くした子どもたちの支援、農業・農村開発に関わる。具体的には、村の母親が担う「ケア・ボランティア」を育成したり、有機農業研修の機会を提供している。いずれも現地 NGO や農業トレーナーに研修を実施してもらう。自分の役割は、活動地の人びとの暮らしや実践、変化を観察し、コミュニケーションをとりながら課題を見極め、その都度必要な研修内容を組み立て、トレーナーとつなぐこと。情報提供も行う。これら学びの機会を通じて、まず活動参加者自身が変化を遂げ、自信を持ち、周囲の人を巻き込み、自分たちで地域に変化をもたらすようになる過程に伴走している。また、現場の抱える課題が、国際・国家レベルの政策の影響を強く受けている際に、政策に対する提言活動（アドボカシー）も行う。

2. キャリアパス

＜社会に疑問を持ち始めた高校生時代＞

1991 年の湾岸戦争の報道に衝撃を受ける。大切な人を失い悲嘆にくれる人びとの映像に「なぜ戦争が起きるのか。止めるにはどうしたらいいのか」の怒りと疑問が大きくなる。数年後、幼い頃から「大切な場所」と教えられていた、田舎の実家の隣にある墓地が、「便利」や「発展」という名のもとに「大きな道路一本」を通すためにつぶされ、遠くに移設されたことに怒りと疑問を覚える。その時「イラクで戦争を起こす人」と「便利のために墓をつぶす人」が重なって見えたこと、当時子どもで「墓」の件で声をあげられず悔しい思いをしたことが後の原点となる。

＜何も考えていなかった大学時代＞

「原点」と自分の将来が結びつくとは夢にも思わず「行ける大学・学部（文学部）」に適当

に入る。スポーツに打ち込み、楽しく充実した日々を過ごすも、就職活動の段になり、自分が将来を全く考えてこなかったことに気がつく。数社を訪問してみるも、面接でウソをついている自分に嫌気がさし、それを親の前でつぶやいたところ「長い人生ちょっとくらい休んでもいいんじゃない」と言われ、あっさりリタイア。そこで将来を真剣に考え、「原点」となった経験が頭をよぎる。

<大学卒業後 海外ボランティアから NGO という存在を知る>

「声をあげられない人たちの立場からモノゴトを見て、社会問題を解決する方法を考えたい」との思いが強くなる。専門性がなく、「まず“問題が起きている”とされる現場を知ろう」と海外で森林保全ボランティア活動に参加、NGO という存在を知る。そこで様々な国の若者と出会い、「大学→即就職」だけではない多様な生き方があることも知る。大学院に戻るか、NGO に参加してみたいと考え始めたところ、縁あってイギリスの海洋生物保護 NGO に就職。

<NGO の活動で感じた疑問>

イギリスの NGO で、優しく尊敬できるスタッフらに囲まれ、充実した日々を過ごす一方、欧米型の「線引き→聖域化して環境保護」のあり方に疑問を持ち始める。疑問を深掘した結果、自分が日本人的な「生活のなかで利用しながら環境保護」のあり方に価値を見出していることに気がつく。このため、一時はイギリスにとどまって留学も考えたが、「社会問題＝誰にとっての何を問題とし、どう解決するか」をとらえる視点と思考を母語で深めることが自分に必要と考え、あえて帰国して大学院に行くことに。

<暗黒の大学院時代>

社会学を学ぶ。先生が厳しく、論文を書くのに苦労した暗黒時代だったが、「現場に暮らす人びとの立場から問題を見極め、解決策を現場に見出す」視点と思考を徹底的にたたきこまれたことが現在の活動につながっている。(先生には大変感謝している。)

<JVC へ 最初の挫折とアフリカの人びとから学ぶ日々>

大学院での学びを経てもう一度 NGO の現場に戻りたいと JVC へ。しかし、入職初日に飛ばされた南アフリカで「世界一」と言われる格差社会を目の当たりにし、自分が目指していた世界がどのようなものだったのか全くわからなくなる。「学び」がいきなり吹き飛んだ。悩みの深い日々が始まるも、出会ったアフリカ人たちの哲学者のように深い思考と実践、人柄から、「人生の価値」・・・のようなものを教えられ、活動を継続、今にいたる。

3. 分科会の内容

なぜ長きに渡り「援助」や「支援」「国際協力」が行われているのに、貧困が世界からなくなるらないのでしょうか。分科会では、事例として、「食べもの」に関わって世界で生じている課題をとりあげ、その課題解決を目指して国際協力を行うアクター（国際機関、各国政府、企業、農民、消費者など）が、何を問題とし、どのような解決方法を求めているのかを検討します。また、ワークショップを通じて、世界で貧困・格差が生じる仕組みについて考えます。これらを通じて今の自分のものの見方を意識化、その強み・弱みを考えながら、将来どの立場で何がしたいのか、そのために必要なことを一緒に考えたいと思います。

4. キーワードリスト

ODA、食料への権利、食糧安全保障、有機農業、緑の革命

5. 参考資料等

- (1) 『エビと日本人』村井吉敬著（岩波新書、1998）
- (2) 『当事者主権』中西正司・上野千鶴子著（岩波新書、2003）
- (3) 『肥満と飢餓』ラジ・パテル著（作品社、2010）
- (4) 『食と農のいま』池上甲一、原山浩介 編著（ナカニシヤ出版、2011）
- (5) FAO 駐日連絡事務所 HP <http://www.fao.org/japan/jp/>
- (6) 特定非営利活動法人ハンガーフリーワールド HP <http://www.hungerfree.net/hunger/>

6. 事前予習用リーディング課題

⑤の HP などから「食べもの／食べること」に関わる課題の切り口を 2～3 取り上げ（例えば「食料廃棄」などなど）、③にあげた「国際協力に関わるアクター」がどのように解決しようとしているかを調べてみてください。うまく調べられない、あるいはわからない場合には、「質問」を考えてみてください。

国際協力・国際開発を仕事にすること考えてみませんか？

☆講師プロフィール

氏名：福村 一成（ふくむら かずなり）

所属：宇都宮大学農学部 農業環境工学部 准教授

略歴：

香川大学農学部卒業、建設コンサルタントを経て、青年海外協力隊（農業土木・エチオピア）に参加。その後、JICA 筑波農業センタ-研修指導員、東京農工大・アリゾナ大大学院、JICA 短期専門家、などを経て 2000 年より宇都宮大学農学部。専門分野は土壌物理、土壌中の物質移動、農地保全、乾燥地の節水かんがいなど。



1. 仕事の内容・研究テーマ

大学教員の仕事について「仕事の概要」的なことを書いても「おもしろい」でしょうから少し研究テーマのことを・・・キャリアセミナーに参加している皆さんには聞き慣れないかもしれませんが・・・農業土木学、特に土壌中の水分や物質・養分、エネルギーの移動に関連する研究分野（土壌物理）が研究テーマの基礎になっています。これは土壌中の水、物質や温度などの量や状態の理解とその応用を含みます。この分野に飛び込んだきっかけは、アフリカ（エチオピア）で農地の所々が白く見えるほどの塩害を目の当たりにしたことがきっかけです。というわけで、かんがい用水の効率の良い利用や農地の塩害防止・除塩をどのようにするかを研究テーマとしています。近年は、アフリカの食糧増産や安定的な生産に資するために小規模な農家でも利用できる簡便かつ安価な点滴かんがいのしくみをどのようにすれば広く使ってもらえるか、どのように活用すれば良いかに取り組んでいます。

2. キャリアパス

香川大学農学部農業工学科をじっくりと 5 年かけて卒業。入学同期と卒業同期の両同期会に呼んでもらえるほどに、両方の学年としっかり学業以外で交流。卒業後は、それまで漠然と途上国の食料・農業開発や国際協力に興味があったので、開発系コンサル企業に就職して国内事業所で約 3 年間、地盤の調査や基礎の計画、調査現場業務、報告書作成などを担当。たまたま、休日に乗った市バスの青年海外協力隊募集広告を見て「途上国行ってみたい、役立てるのでは（過信？）」と退職し、東アフリカのエチオピア国に農業土木隊員として派遣、農業省開発局でかんがい計画や測量、農地保全、展示農場造成などを担当して 2 年間活動。

帰国後は、エチオピアで必要性を痛感した乾燥地の塩害や水管理を学ぶため、東京農工大大学院へ、在学中に米国の砂漠地帯の町エルパソにある大学研究所で塩分管理とかんがい手法について実験・研究を行い修士論文にまとめた。修了後は国際協力機構（JICA）筑波

農業研修センターでかんがい排水や水管理の研修コース指導員として勤務し、様々な途上国からの研修員に講義、実験指導、そして全国各地の農業水利・水資源管理・防災施設への研修引率などを担当。

その間に、JICAの専門家養成のための長期研修制度で乾燥地や半乾燥地のかんがいや水管理について2年間の海外研修の機会を得て、アリゾナ大学の農業生物システム工学科で乾燥地のかんがい排水・塩害について研修、修了後はそのまま博士課程へ。

学位取得後は、研究所や大学での研究補助、開発コンサルタントでの調査業務補助や、コンビニなど様々な非正規・パートタイムをしつつ「食いつなぎ（笑）」、2001年より宇都宮大学の教員となり現在に至る。

3. 分科会の内容

- 自分の専門分野、専門性や特徴を知る。
- 専門性と国際協力・国際貢献はどのように関わることができる？
- 現在の自分は、将来こうなりたい、こう関わってほしいという自分像は？
- 大学修了10年後にどのように国際協力・国際貢献の分野と関わってほしいか？
- 実現するためには何が足りない？ 何が必要？ どうすれば充足？等についてディスカッションの中で考える。

参加者が国際協力や国際貢献との関連で専門分野の特性や様々な能力の「こうありたい」と「いまの自分」を具体的に認識し、ギャップを埋めて「こうありたい」を実現するために今後の大学生活でどのような目標を立て、何を行い、どのように取り組んでゆくか（キャリア形成に向けたアクションプラン）を定めることを目指します。

4. キーワードリスト

スペシャリスト、ゼネラリスト、(各自の) 専門分野名

5. 参考資料等

- (1) 自分の所属する学部や学科、コースを紹介するホームページ
- (2) 国際協力・国際貢献で自分が思い浮かべるグループ、組織、個人やその活動についての資料

6. 事前予習用リーディング課題

- (1) 「明日、一人で行ったことのない途上国に1年間派遣される」と決まりました。今日1日あなたはどのようにして過ごしますか？ 考えてみてください。
- (2) 4. 「事前に調べるキーワードリスト」欄で考え、整理した内容を説明できる。
- (3) 自分の長所や短所、得意・不得意について考えてみる。

多文化共生社会のなかの活動カー労働、仕事、活動、キャリアー

☆講師プロフィール

氏名：飯塚 明子（いづか あきこ）

所属：宇都宮大学 留学生・国際交流センター 助教

略歴：

兵庫県姫路市出身。米国の大学で経済学を勉強した後、インドの NGO での 3 か月のインターンシップを経て、神戸の NPO 法人 CODE 海外災害援助市民センターに勤務し、海外の災害復興支援に従事。オランダの大学院で国際協力を学んだ後、NGO や国連勤務を経て、ベトナムに 3 年間駐在し、コミュニティ防災事業に従事。その後京都大学で地球環境学博士を取得し、日本の NGO のスリランカ事務所長として防災分野の官民連携事業を運営。昨年 4 月から宇都宮大学留学生・国際交流センターに勤務。2 児の母。



1. 仕事の内容・研究テーマ

昨年 4 月から宇都宮大学で働き始めて 1 年半。主に以下の仕事に従事。

- ・ 大学の留学や国際交流に関する業務

海外留学や国際インターンシップについて興味のある日本人学生や留学生の相談にのり、留学生・国際交流課と説明会等を行う。また大学の国際化を推進するために、国内外の留学フェアや会合に出席したり、国際インターンシップの派遣先や協定校を開拓。

これまでの経験から、留学に興味のある日本人学生や外国人留学生の気持ち（不安や期待等）に共感でき、自分の時を思い出したり、（時代は変わっているので）自分の留学時代との違いに驚きながら仕事している。特に海外から成長して帰ってくる日本人の学生や、宇大で充実した学生生活を送っている留学生を見ているととてもやりがいを感じる。

- ・ 災害とコミュニティに関する講義や留学生向けの講義を担当

今年度から基盤教育科目や全学科目で災害とコミュニティに関する講義を担当。この講義では、災害について知り、国内外の様々な事例から学ぶことに加えて、防災分野の実践で活動しているゲストスピーカーによる講義や、栃木県防災館や気象台での課題授業を通して主体的に学び行動することを目的としている。新規開講授業なので授業準備に多くの時間がかかり、毎週授業の前はそわそわして、終わるとほっとしている。

- ・ コミュニティ防災や国際協力と防災に関する調査研究

国内外の被災地におけるコミュニティを核とした防災活動、郷土芸能と災害復興、防災教育等。海外の被災地におけるマルチアクター（政府、NGO、国際機関等）による国際協力支援や、プラットフォーム構築を研究テーマとして調査。自分の興味のあるテーマを深く調査し、論文や発表を通じて公開するというのは、これまでの NGO の仕事ではほとんどなかったため、とても新鮮に感じる一方で、研究費や時間の確保、知識や経験の不足、論

文を投稿してもなかなか出版が決まらない等、悩みも尽きない。

2. キャリアパス

[~20代] 兵庫県姫路市出身、高校まで姫路。高校は成績不良で、バトン部、バンド活動、アルバイトに打ち込む。

[~25歳] アメリカとオランダに留学、インドの NGO で海外インターンシップ。友人の誘いで神戸の NGO で翻訳のボランティアをしたことがきっかけで、海外の災害復興支援の NGO で働き始める。NGO での仕事は海外の被災地復興支援事業の運営、日本での事業報告会、講演、会報誌の執筆、理事会運営、支援者やボランティア・メディア・教育関係機関等との連絡調整等多岐にわたり、毎日学ぶことが多く残業が続いたが、とても充実した日々でその後のキャリアの基礎が築かれた時期。

[~30歳] 日本から出張ベースで海外事業を運営するのではなく、海外に駐在して事業に専念したいという思いから転職し、京都大学の研究員としてベトナムに赴任し、国際協力機構（JICA）のコミュニティ防災事業に3年間従事。毎週、山間部、平野部、海岸部の事業地に行き、住民の方からお話を聞いたりしながら、ベトナムの研究者と事業の進捗状況をモニタリング。現地の人々のニーズを踏まえて、防災だけではなく、栽培、養殖、教育、建築、文化、生活習慣等の活動も実施し、多国籍、他分野の研究者と協力して事業を実施する意義を実感。

[~35歳] 結婚。大学の先生のすすめで1年間の社会人博士課程に入り博士号を取得。長男を出産。パートナーの仕事に伴い、大学を辞めて家族でスリランカに移住。次男を出産。スリランカ駐在の4年間のうち、最後の2年はスリランカにある日本の NGO の官民連携事業に従事。スリランカでは同じ防災だがコミュニティレベルではなく、国レベルの防災プラットフォームを構築する仕事を現地 NGO と協力して行う。ヨガインストラクターの資格を取得。

[35歳~] 現地 NGO に事業を引き継ぎ、日本に帰国、家族で宇都宮大学の近くに引っ越し、宇大で働き始める。長男は小学1年生に入学、次男は大学内の保育園の年中に進級。留学や仕事で15年程海外に住んでいたため、海外の現場でもう少し働きたい思いはあったが、日本国内の課題や日本の被災地についても関わっていきたくらいと思い、日本に生活基盤を移す。また海外で様々な立場から防災に関わってきた過程で、コミュニティを核とした防災の必要性を強く感じ、現在の研究や教育に至る。運転免許を取得。

3. 分科会の内容

日本で暮らすことは、自然や災害と共生すること。まず日常生活と防災について考えた後で、災害が発生した時のことをイメージしどのように対応するかを考えてみましょう。そして外国人や多様な背景を持つコミュニティにおける防災について、また防災に関わる多様なアクターとその役割について考えたいと思います。防災をキャリアとしたい人も、そうでない人も役に立つ内容なので主体的に学ぶことをお勧めします。

[分科会 1]

- ・ アイスブレイキング（自己紹介）と導入講義「災害と日常」

[分科会 2&3]

- ・ 災害イメージトレーニング：災害発生から1年間の状況をイメージしてみよう
- ・ 多文化共生ワークショップ：外国人と避難所について考えてみよう。
- ・ 災害支援ワークショップ：防災に関わるアクターを演じてみよう

4. キーワードリスト

防災、自助・共助・公助、災害弱者

5. 参考資料等

- (1) 広瀬弘忠「人はなぜ逃げおくれるのか」集英社新書、2005年
- (2) 渥美公秀監修「地震イツモノート キモチの防災マニュアル」ポプラ社、2011年
- (3) 村井雅清「災害ボランティアの心構え」ソフトバンク新書、2011年
- (4) 片田敏孝「人が死なない防災」集英社新書、2012年
- (5) 磯田道史「天災から日本史を読みなおす」中公新書、2014年

6. 事前予習用リーディング課題

- ・ 上記の参考資料のうち、興味のある書籍1冊を事前に目を通して来てください。
- ・ 分科会の「災害イメージトレーニング」で、災害発生時の状況や直後の様子、復旧・復興期の様子を想像します。事前に1.自分や家族を知る、2.自宅を知る、3.地域を知るためのワークブックに記入して参加してください。ワークブック様式は事前に配布します。

違いを強みに変えるコミュニケーション

☆講師プロフィール

氏名：岩井 俊宗（いわい としむね）

所属：非特定営利活動法人とちぎユースサポーターズ
ネットワーク 代表理事

略歴：

1982 年生まれ。栃木県宇都宮市出身。2005 年宇都宮大学国際学部卒業後、ボランティアコーディネーターとして宇都宮市民活動サポートセンター入職。NPO・ボランティア支援、個別 SOS に従事。

2008 年より若者の成長機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの加速を目的に、とちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010 年 NPO 法人化。代表理事を務める。

その他、認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県協働アドバイザー、一般社団法人とちぎニュービジネス協会議理事等、他多数。



1. 仕事の内容・研究テーマ

若者の力を活かして、地域の課題解決・活性化を加速することを使命とし、若者の挑戦と新たな力・新たな変化を求める地域の現場をつなぎ、育むプログラム開発・コーディネート事業を実施。

【独自事業】実践型インターンシップ GENBA CHALLENGE(2012～)、ソーシャルグッドスタートアップキャンプ「iDEA→NEXT」(2012～)、ソーシャルビジネスセミナー(2014～)

【受託開発事業】宇都宮大学課題発見・解決型インターンシップ(2013～)、栃木県 UJI ターン促進事業「はじまりのローカルコンパス」(2015～)、宇都宮市起業家精神養成講座「起業の実際と理論」(2015～)、那須烏山市ローカルベンチャー育成事業(2016～)、栃木県地域づくり担い手育成事業(2016～)、宇都宮大学 宇大未来塾(2017～)、コカ・コーラジャパンボトラーズ CSR 事業「ミライ×キャンパス」(2017～)

創設から 8 年、関わってきた 20 代～30 代の若者は、17,000 人(活動時間 70,000 時間)を越える。その内、自らの意志と力で課題に立ち向かう起業した若者が約 38 組輩出。また組織の次の一手を創り出す現場に若者が長期間参画する実践型インターンシップや行政施策のプログラム開発など、多様な組織に若者の力を取り入れた変化を提案・実施するプログラム開発と運営、それらを通じて化学反応として新たな価値を創出する「触媒」の機能を持ったコーディネート力は、他県からの講演依頼や『ソトコト』などの全国紙にも取り上げられることを踏まえ、高いものと自負している。これらの実績から、変化を創り出していくコーディネート事業に加え、若者と民間企業、また行政(国、県、市)、大学、をパートナーとし協働による事業推進をしていることが独自性であると捉えている。

〈受賞歴〉 中小企業庁表彰 創業機運醸成賞 (2018.2.9、全国 22 団体)、下野新聞社「とちぎ次世代の力大賞」奨励賞(2018.5)

2. キャリアパス

1982 年宇都宮生まれ。4 人兄弟(長男)、7 人家族。幼少期は、ガキ大将。森に基地を創って遊ぶ。小学生：サッカーに打ち込む。夢は、冒険家と医者。中学生：バスケットボール(部長)に打ち込む。生徒会長→リーダー的役割を主体的に捉えるようになる。

高校生：JRC 部。2 年の夏、赤十字派遣でネパールへ。3 週間現地で井戸掘り、学校見学、献血事業視察。→将来、“途上国で働く”ことを描き、現地の日本人の駐在員にどうしたらその仕事に就けるか手紙を書く。“大学生で世界の勉強してください。英語+もう 1ヶ国語”→大学に行く意味を見つける。→地元で、それができる大学が。

大学生(宇大国際学部、友松研究室)：NGO マネジメント、住民主導の開発を専攻。2 年生くらいから国内問題にも目を向ける。特に NGO・NPO などの市民による社会課題解決に可能性を感じるものの、職業として成り立っていない現状→“NPO・NGO で飯を食うモデルになる”と自分に旗を立てる。

2005 年大学卒業後、ボランティアコーディネーターとして、NPO・ボランティアを支援する宇都宮市民活動サポートセンター入職。制度では支え切れない SOS(年間 100 件程度の相談)に、ボランティアチームを組み対応する。その中で大学生等若者が関わると突破できる数多い体験から、2008 年若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し若者による社会づくりの促進を目的にした事業を行うとちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010 年 NPO 法人化。現在代表理事を務める。

現在 36 歳、妻(国際学部同級生)9 歳の息子、3 歳の娘と 4 人暮らし。学生時代の趣味は、国内外を旅すること(屋久島、ママチャリで富士山・成田空港・レインボーブリッジ、アメリカ、韓国、マレーシア、シンガポール、ベトナム)。

3. 分科会の内容

- ・ 違いを強みにしていくためのコミュニケーションとして、質問力、言葉の意図を読み解く力、建設的に意見を積み上げていく思考、相手の HAPPY を提案していく力を養う。
- ・ 演習(ワークショップ)を通じて、実践的にコミュニケーションを重ね、自身のやりたいことの実現に向けて仲間の力を借りていくこと、またそれが相手に対しても HAPPY に感じられる提案を創り出していく。
 - コミュニケーションとは何か。
 - 人が喜びを感じるメカニズム、マズローの 5 つの欲求、ジョハリの窓など。
 - アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方。

4. キーワードリスト

- ・ コーディネート
- ・ ダイバーシティ
- ・ 価値創造

5. 参考資料等

特に無し。

6. 事前予習用リーディング課題

- ・ 自身の自己紹介をご用意ください(氏名、所属、大学で学んでいること、分科会を選んだ理由、将来の展望、今回持ち帰りたいこと)

2018年度国際キャリア教育プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア教育」事前学習資料集

発行日：2018年7月25日

発行：宇都宮大学 国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

学部		学科	
学年		氏名	